

平成 27 年度「授業評価・授業研究報告」

学校教育講座 梶原郁郎

(1) 授業の目的

教育学基礎演習 (一年次後期: 受講学生数 15 名) は学校教育講座の教員二名で担当して、前半・後半というかたちで授業を担当した。この報告書は梶原担当の後半に関するものである。まずこの授業の目的を、愛媛大学教育学部「教職課程のディプロマ・ポリシー」との関係において明示しておきたい。

- (1) 教科・教職に関する幅広い基礎的知識と、得意分野の専門的知識を有している。
- (2) 学校現場で生じている問題を始めとして地域や社会全体に関わる課題について、適切な対応を考え議論することができる。
- (3) 児童・生徒の発達に応じた授業の構成や教材・教具の工夫ができる。
- (4) 実践から学び、自己の学習課題を明確にして、理論と実践を結びつけた学習ができる。
- (5) 教育的愛情を持って児童・生徒に接することができるのと同時に、多世代にわたる対人関係力を身につけ、社会の一員として適切な行動ができる。

08 年指導要領総則で知識の活用が謳われているが、教科の知識の活用は教師・学習者双方において容易なことではない。学習者が知識を活用できるように保障するためには、教師が知識を活用できていることが前提となる。この課題を前に私は本授業の教育内容・方法として次の点を意識した。知識の暗記に忙殺されてきた学生は、知識の活用とはどういふことが分からないのではないかとこの点を踏まえて、学生に学校時代の学びの姿(暗記主義の学習)を振り返らせ、何よりもまず、知識の活用を経験させる。この点を授業の目的とすることで、上述の DP の (1) の「教科・教職に関する幅広い基礎的知識」を具体的に保障しようと意図した。この DP (1) に加えて DP (3) を目的意識として本授業を行った。

(2) 授業の内容・工夫

この授業では、まず縄文時代の内容を事例として、考えながら学ぶ経験を学生に保障するために次のように工夫した。(a) 白樫のドングリをかじる経験によって、ドングリはそのままでは食料にならないという知識を、実感として獲得させる。(b) その知識を土台とすれば(活用すれば)、縄文時代のどのような情報をひきつけることができるのか。その知識を土台とすれば、土器の必要性、さらには縄文時代の人口増加の可能性を思考できる。

(c) 以上の知識を踏まえれば次にどこに思考を展開させるかという問題意識で、文献を読む。このことで思考の展開として知識を獲得できるように配慮する。このように教師が思考できることが DP (3) 保障の前提となる。

次に詩「鹿」を事例として、教師の発問の必要性を実感できるように、講義内容を工夫した。受講生も、「鹿は今狙われているわけではない」という解釈②を出せず、鹿はこの後撃たれて死ぬという解釈①であった(これは「鹿」の研究者の解釈でもある)。そこで作間の知見を踏まえて、「鹿はいつから「知っていた」のか」という発問を出発点として、解釈②の可能性も十分ありうることを、私が発問を出すことで、学生に考えさせた。その解釈②に気づくには、教師の発問を不可欠であるということを学生に経験させることで、教師の発問の必要性を実感できるようにした。以上は、解釈②を児童に考えさせるための前提(DP (3) 保障の前提)となる。

(3) 授業時間外学習の促進

上述の縄文時代学習では、(a) と (b) を私が問を投げかけながら学生に考えさせるかたちで進めた後、(c) について、「次にどこに思考を展開させるか」という課題意識の下、縄文時代の文献を探して自分が気になるところを読んで、そこにフセンを入れてくるように課題をかした。この課題について出席者 12 名中 9 名が取り組んできており、愛大図書館

以外の図書館から文献を借りてきていた学生もいた。9名以外の学生6名についてもその課題について次週までの課題とした。

#### (4) レポート作成の技術教育

以上の縄文時代の授業で経験した思考の展開を段落ごとに叙述する、レポート作成を本講義の課題とした。上述の (a) (b) をレポートにする作業は私が説明して、さらに自分で探した資料で書く (c) については、段落書き出しの文章（前の段落からの思考の展開がわかる文章）を私が与えて、独自の段落を3つ程度作る課題（全部で10程度の段落によるレポート）をかした。レポートは全受講生が提出し、縄文時代の基礎的知識は理解できていた (DP (1))。

#### (5) 授業の成果－アンケート調査結果－

この授業がどの程度自分にとってためになったのか、全講義後、アンケートをとった(11名)。その質問項目は次の通りである。

- [A] (1) 縄文時代の授業は理解できたためになったか。(2) 縄文時代の歴史について、勉強してみたくなったか。
- [B] [思考の展開に対応させて段落を作る] 第一歩について理解できたか。
- [C] 「鹿」の授業で、[発問なしでは着想できない解釈] は理解でき、ためになったか。
- [D] 児童生徒に考えさせる授業を保障するためには教師側に学習が必要となること、発問を作ることは容易ではないということは、縄文時代と「鹿」の授業を通して理解できたか。

[A] (1) [B] [C] [D] については下記上の様式で、[A] (2) について下記下の様式で、ひとつを選択するかたちで回答を求めた。

- ① [ ] よく理解できたためになった  
 ② [ ] 理解できたためになった  
 ③ [ ] あまり理解できなかった  
 ④ [ ] 理解できなかった
- ① [ ] 非常に勉強してみたくなった  
 ② [ ] 勉強してみたくなった  
 ③ [ ] あまり勉強してみたくならなかった  
 ④ [ ] 勉強してみたくならなかった

その集計結果は次の通りである。

A (1)	①9名、②2名	A (2)	①3名、②8名
B	①7名、②4名	C	①6名、②3名
D	①10名、②1名		③2名

アンケートの最後に自由記述で授業の感想を記入させたので、いくつか挙げておきたい

- ・授業作りにおける教材研究の重要性を感じました。ドングリでも知的好奇心がなければドングリに対して深く知ろうともせず素通りしてしまうと思うので、同じように様々なことに関心をもつ必要があると感じました。
- ・今回の授業で知識が繋がっていく感覚を感じることができました。
- ・今回の授業で、レポートを書く上で段階をふんで書くことの大切さを学ぶことができました。
- ・しっかり考える授業はとてもおもしろかったです。いきなりのレポートはおどろいたけど [----]。

#### (6) 今後の課題

以上のアンケートの結果を踏まえて今後の課題を記しておきたい。第一に、[C] の結果についてである。2名が「あまり理解できなかった」と回答している。その中の1名は、最後の感想の欄でも、理解が不十分であった点を記している。この項目は、教師の発問なしには教科の知識の理解は難しいということの経験を、学生ができたかどうかを尋ねたものである。その経験がない場合、授業における発問の必要性が教師の必要性として理解できない。この点をより多くの学生に保障していくために、そのレベルの発問の事例を複数提示していく等の対応が求められる。

第二に、アンケートの調査結果をレポートの内容に照らしてみたとき、どの学生も、指定紙面以上の内容で提出されていた。レポートの内容として課した上述 (c) についても、学生各自、文献を図書館で探して、着眼したところを引用しながら書くことができていた。四年生でも著者の見解と引用者の意見との区別をしつつ叙述することはなかなかできないが、その区別を引き続き指導しておくことは学生生活を通じて課題としていかなければならない。この点については、三年生時の専修科目においても意識して指導し、DP (3) についても引き続き保障していきたい。